

# 親を安心して預けられる病院づくり！



## 精神神経科医師 大塚宣夫

1980年 青梅慶友病院を開設し院長

2005年 よみうりランド慶友病院を開設 2010年 慶成会 会長に就任

職員総数 1136名(青梅783 よみうり353)

許可病床数 青梅 736床 よみうり 240床

気持ちだけの介護は 患者も家族もつらい

テレビ東京 カンプリア 2013年6月20日 放送

人は、どこで死ぬのか？晩年をどこで過ごすのが幸せなのか？  
 高齢者専門の慶友病院は、入院待機者の絶えない人気病院である。  
 大塚宣夫(おおつかのぶお)氏が、「親を安心して預けられる病院」づくりを目指して、33年前に創設した。  
 全国の病院の多くが赤字に苦しむ中、突出した理念とビジネスモデルで、  
 超高齢化社会の介護・医療界に一石を投じ続けている。

## 病院は究極のサービス業

「母の日」。花束を抱えた家族がゾロゾロ病院を訪れ、入院している患者とともに楽しそうに庭を散歩。

高齢者の患者たちは、朝起きるとパジャマから部屋着に着替えて自由に過ごし、飲みたければお酒もたしなむ。病院に有りがちな、イヤな臭いもなく食事もおいしい。

それは、この病院の会長の大塚が「病院はサービス業」であり、患者と家族を「顧客」と捉えているからだ。

青梅慶友病院は1980年、大塚によって開設された。精神科の勤務医であった大塚は、友人の祖母から相談を受け「老人病院」の存在をはじめ知った。それが、大塚には現代の『姥捨て山』であるように見え、「自分の親を安心して預けられる施設を作ろう」と決意する。以来、豊かな最晩年を送れる病院を目指し、独自の取り組みを続けて来た。

高齢者に相応しい医療とは、若い人に対する医療とは違い、過剰な検査や治療を避け、必要最小限の薬や治療に留めようとする。一方、生活面では尊厳を保って高齢者に接し、日々の生活を活性化することで、最晩年の生活の質を高めようとする。そうした方針で「胃ろうの状態入院したが、今ではステーキも食べられる人」「歩行器で入院したのに、今やスタスタ歩いている人」など、残された能力が最大限、引き出されたと感じている患者と家族を取材。

青梅慶友病院で実施されている「患者に対し敬語を使う」「パジャマから部屋着に着替える」「病院のイヤな臭いは徹底的になくす」「食事は最大限美味しく作る」などの取り組みを紹介する。

## “最晩年の生活の豊かさ、を支える組織は、生活・介護・医療の順番。”

ここでは、法定の4割増しの職員を配置し、患者をベッドから起こし、寝たきりの患者を減らそうとする。

リハビリの職員は、通常のリハビリ機器に止まらず、音楽会、和菓子の会などさまざまなイベントを仕掛け、高齢者を喜ばせようとする。又、ユニークなのは「生活活性化員」なる存在。体育大学出身の男性が、力仕事を始め、体操、習字、算数などを患者と一緒にやり、病棟全体を活性化させる。

こうした病棟全体の運営は、医師ではなく看護師長が采配している。14人の師長たちは、さらなる質の向上を目指して、刺激し合う。

## 人生の最期は自分で決める

60代から考える最期のかたち

大塚 宣夫



ダイヤモンド社